

江戸川コナン？知らない子ですね！

宇垣秀康

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

江戸川コナン世界はセクシヤル的な事件も少なく、いわゆるサイコパス的な犯罪者も少ない。

そんなお山の大将が、理屈も何も通じないような目に逢うとどうなるか：

アンチ作品、ヘイト作品です

コナンは好きですが探偵団やら彼女やら周りの頭のゆるみっぷり  
があまりにも酷いと思ひまして…

別作品のデータ飛びからのやけ作品です。

厳しめが嫌われてるのは理解していただきますので読者の方もお互いの  
精神安定のためにも読まずに戻っていただいで結構です。

## 目次

1. 頼られる探偵は悪意を知らない。	1
2. それでも僕はやってない	10
3. We're bad guys. It's what we do.	16
4. 工藤優作は選ばれない	33
幕間・野に咲く花のように 1 子供たちに憤慨したので	47

# 1. 頼られる探偵は悪意を知らない。

日本で高校生探偵と言えば？

という質問が来れば大抵は「工藤新一」と答えるであろう。

中には「服部平次」や別の高校生の名前も上がるだろうが…

彼らは積極的に警察に協力し、警察が現場で見つけ出せなかった証拠を何処からか見つけ出し、何処であろうとその場で犯人を言い当てる。

元を辿れば様々な人物が昨今の高校生探偵の様に事件を解決に導いてきたが、解りやすいのは件の工藤新一の父親である「工藤優作」氏であろう。彼は自身の著書である人気シリーズ「ナイトバロンシリーズ」で有名な作家であると共に、警察に協力し謎を解くことで有名であった。

周りから見ればそれはまるでショーのように鮮やかで、警察を軽く蹴散らす痛快さや、被害者の身の上話を聞き、推理と一緒に解くという世俗の鬱憤を晴らすエンターテイメントのように扱われている。

そんな彼らに対抗して犯罪を犯す側もトリックを複雑にし、そのトリックが解かれたときは何処か納得しているのか自身の罪について全て自白するのだ。自身もショーの演者になるかのよう…

しかし世の中そんなショーの様な事件だけじゃない。本当の狂っている人達との対応こそ探偵たちに求められる資質じゃないだろうか…

そして彼らの行いは自身に帰って来るということも教えなければいけないのではないだろうか。

―とある新聞より抜粋―

日中にも関わらずこんこんと雪が降る大津馬村はその雪の白さにパトカーや救急車のランプの色が反射し村が燃えているような色に

真つ赤に染まっていた。

あちらこちらに警察が集まり、救急車は唇を押さえている大人や目を押さえている大人達が怒号を挙げている。

きつかけは村の排他的な考え方から来たいじめだった。東京から引越してきたその少女は余所者というだけでいじめが始まった。いじめを行った者たちは自身の家庭環境等から来るストレスも彼女にぶつけるようになった。

そして越えてはいけない一線を越えたのだ。

自宅にいた彼女の家族を暴行し動けないように固定しその家に火を放ったのだ。

残ったのは苛められていた女の子と火事の中唯一生き残った妹だったが妹は集中治療室に入り話も出来なかった。

故に警察は苛めを受け、家に居なかった少女に質問をぶつけたのであった。勿論現場でへたれこむ彼女を大きめの車の中で他人に聞かれないように

家族の中は不仲でなかったか？

家に燃えるようなものはなかったか？

等、所謂自殺や何か家庭に原因はなかったかという質問だった。この時点で彼女は家に居なかったことについて触れてはおらずこれから質問をしようとしていたとき、外から歓声のような大きな声が聞こえてくる。そしてそれに答えるようにカメラやテレビに向けて特徴的な髪の毛をした男の子が警察の制止を無視して車に向かって歩き

「安心してください。この事件は僕、工藤新一が解決します！」

と大声で答える。

野次馬は大声でまた歓声をあげるのだった。

一少し前、工藤邸ー

自宅にて、部活を終えシャワーをしテレビを見ていた新一は暇で

あった。シャーロック・ホームズに憧れ、その解決力を警察から頼りにされている自覚もあるが、その事件がなかなか起きないのだ。彼と彼の父親は探偵を自称するがその資格は有していない。その為現場でたまたま事件に遭遇するか警察から協力依頼がないと謎と直接向き合えないのだ。

そうなった時、警察は実績をとり彼の父親に依頼する事が多く彼はそれを不服に思っていたのだ。

そんな時、テレビにとある村にて火事の中から家族の変死体が発見されたニュースを見る。面白そうだとわくわくして続報を見ていると自宅の電話にコールが掛かってくる。

いいところなのにと電話に出る新一

「あーもしもし？工藤ですが？」

「あ、どうも！群馬県警の山村と言います。工藤優作さんってご在宅です？いつもの協力依頼したいんですけども」

「今父は家にいるんですが仕事の締め切り前なんで明日とかにまた連絡下さい。(くそっ！また父さんかよ！)」

「ええー困るよお。折角の大きそうな山なのに僕の出世のチャンスがあ」

「父に伝えときますから、要件聞いときますか？」

「うーんそうだなあ。最初に依頼したとなれば僕の株も上がるか…うん、頼むよ。と言ってもテレビでやってる火事の事件んだけどね？」

「え！あの変死体の!？」

「うん、それぞれ！その犯人探しを手伝って欲しいんだけど！」

「やります！」

「へ？君が？何で？」

「僕は工藤新一！工藤優作の息子で探偵です！」

「あああの有名な！そうか！なら君も来てくれない？お父さんも来て欲しいけど君にも手伝って欲しいなあなんて…」

「わかりました！」

その後合流場所など打ち合わせをし、父に事件について依頼を受け

たこと、父親も来るように文章に残し彼は現場に向かった。  
ちなみに母親は父と喧嘩をしているため自宅には居なかった。  
新一はわくわくしながら現場に向かったのだ。彼を満足させる謎、  
それだけを楽しみに

―現場―

黄色い歓声を聞き警察は迷惑そうにするが、山村という刑事が勝手ながらも依頼したのを知り関係各所に連絡を取りながら探偵と情報を擦り合わせる。

そして生き残った長女に聴取をとっていることを知ると探偵は聴取に参加したいと言い出した。

遺族の感情も考え、落ちついてからと言うのだが山村と工藤は聴取を取っている現場に強行し、不躰な質問をするのだった。

「野咲春花さんですよね？」

「おい、山村！部外者連れてくんじやない！」と、聴取を取っていた婦警が怒るが

「まあまあ！こちらは協力してくれる探偵の工藤新一君ですよ！先輩落ち着いて…ささ、工藤君はばーんと質問しちゃってください！」

と、閉めきっていた車を開けたまま工藤を聴取に参加させた。

「それでは春花さん、何故あなたは現場に居なかったんですか？」  
「それは…」

苛められていたからとは言えず言い淀む彼女に山村は余計な一言を漏らす

「案外君がやつちやったんじやないの？若いつて怖いねえ」

カツとなった彼女に新一は更に追い込むようなことを聞くのだった。

「家族だろうと殺す人はいますからね。 じゃなければ何故家に居なかったのか言えるはずです」

彼女は頭が真っ白になり工藤と山村に襲いかかろうとした時、婦警や刑事たちに押さええられ泣くしかなかった。

山村たちも襲われそうになり慌てたが、押さえられてるのを見て更に周りに聞こえるように彼女の疑惑を訴えたのだ。

これにより他の刑事たちから叱責を受け、現場から出るように言われるが山村を連れ立って父と合流するホテルへ向かいながらも少女への疑念を強める新一であった。

仕事を終えた父も合流し、警察にて調査をするなかで彼女が苛めを受けていたことを知り、学校にて先生たちからも調査を受けるなかで「そんないじめは確認できない」

と返答があった。そこで新一たちは苛めを受けていたという嘘をでっち上げた長女が家族を殺したのだろうと推理したのだった。

彼の父はその推理を否定し再調査するよう山村以外の警察と話を進めるようだ。

そんな中、件の長女が行方不明になる

これで犯人は確定だと勇み足で彼女を指名手配するよう動く山村と新一。

そんななか、苛めをしていたとされる学生たちの変死体が続々出てくるのだ。

あるものは顔に釘を打たれパイプで滅多打ちにされ、あるものは口を切られ古井戸に落とされ失血死しており、またあるものはボウガンの矢が刺さった状態で池から発見された。

当然学生たちの親は警察や教師にどうなっているのか訴えるが返答は芳しくない。

そんな中、工藤優作は苛めがあったことの実態に行きつき、親たちを集め担任たちを追い詰める。

そんな中、担任は吐いた。彼女自身も学生時代苛めを受け、追い詰められた状態が当時を思い出させた。彼女は意識朦朧となっているが優作や親たちは彼女を責める。

そんな時だった。

担任はある保護者の目を潰した。目が嫌だった。彼女を追い詰め



る目が

別の親が担任の胸ぐらを掴む。

担任はその親の唇を噛みちぎった。口が嫌だった。彼女を責める口が

騒ぎになる教室で担任は優作に向かいふらふらと歩き出す。

後退る優作と離れる保護者たち

優作を壁に追い詰めた担任はにやあと笑い

「楽しかった？ 追い詰めるのは？ でもね、追い詰めたのはあなた何だからね？」

と、言ったと共に優作の右目と左耳を潰した。

複数人が恐れて固まっている間に担任は逃げる。

逃げる。逃げる。私は悪くないと

逃げた先で除雪車に引かれ、担任は原型を留めずこの世を去った。彼女は最後までこの世を呪っていたのだろう。

野咲春花を探していた新一たちは唯一彼女を守ろうとしていた男にボウガンを構える彼女を見つける。付近には別の少女が血まみれで倒れており、既に現場は雪に血が染み込みまっかになっている。

新一たちが止めようとするも距離があり、新一は春花を止めようと近くにあった石を蹴った瞬間、ボウガンは発射され、男の子に刺さり、同時に新一が蹴った石が彼女に当たった。

新一たちは男の子を保護しようと女の子を取り押さえた時、刑事たちにいじめの実態と長女の祖父をボウガンで打たれた男の子が暴行していたことが判明したことが解る。

呆然とする現場に散らばった男の子の持ち物の写真のなかに家事で燃えた女の子の家族の写真があることに気づく刑事たち。

呆然とする新一たちに幽かに残った力を振り絞り女の子の口から漏れたのは

「やったよ……」

の言葉のみ……

彼女の復讐劇は幕を閉じ、彼女は安らかに眠ったのである。

今回の事件で蓋を開けて解ったことは、閉鎖的な環境下で発生した苛めと、学校による苛めの隠蔽、家庭不和からくる悪影響から発生したとんでもない事件であったことだ。

警察としても初動の段階で功名心を出した刑事が勝手に探偵に依頼したのが問題とされ、その探偵も功名心が出た高校生で間違った推理をしていたのは本人が大声でショーをしていたため周りに知れ渡っている。

いじめ被害者の祖父は自身の怪我が落ち着き、火事の唯一の生き残りであった妹も亡くなった事から、騒ぎ立てるのをやめるのを社会へ懇願した。その為メディア達からの攻勢はある程度落ち着いたが、警察や探偵たちへのヘイトは凄まじいものである。

警察は隠蔽しきれなかった。探偵と一緒に被害者を責め立て、最後まで追い詰めたの経緯もある。

探偵もすぐに開き直れなかった。父は相手のバックボーンを考慮することを怠り、自身の推理に酔い、結果失ったものは自身の一部だったのだ。自身の戒めとするには大きな代償だった。

息子は、自身の勝手な思い込みを前提に推理を進め挙げ句は被害者にとどめを指した形になったのだ。

春花は警察たちが駆けつけた段階で既に男の子と殺しあいをしており、最後の力を振り絞っていた。そして止めと同時に石を当てられ緊張の糸が切れたのだった。

検死の結果、失血死ではあったものの新一が当てた石も当たりどころが悪く原因の一端と見られている。

本当は捕まってもおかしくないのだが周りの刑事たちがなにもしなかったことや今までの経歴からなんとか逮捕は免れた。

現場にて探偵が野次馬を煽ったことも問題になったが今までショーをネタにしてきた分マスコミたちもあまり強く責められな

かったのだ

そして季節が変わり、世論がある程度落ち着き謹慎まで食らっていた自身の推理に絶対の自身を持つていた彼は直にこう考えるのだ

―間違えた。くそっ！次こそは！俺が謎を解いてみせる！―

次などない。

次などないのだ。

死んだものに次などない。救われなかったものに次などない。

次があるのは残されたもの。又は反省するものにだけ与えられるのだ。

今回被害を受けた探偵の父親は彼に色々教え込んだ。ヘリコプターの操縦、銃の打ち方。

ただ唯一他人のことを思いやれる優しさを教えることを怠ったのだ。

こうして世界は回り出す。

探偵を中心に回り出す。

彼の者が自身の手落ちからその身が小さくなってから

あるものは心に穴を開け復讐を誓い

またあるものはなにも考えず楽しむために

悪意は増幅し彼を襲う。

それは俗に自業自得ともいうがいつか彼も理解するだろう

## 2. それでも僕はやってない

「この人痴漢ですー」

いつもの通勤電車に乗り、いつも通り満員電車で揺られていた僕、金子は突然女子高生に腕を捕まれ大声で叫ばれる。

しかし自身は身に覚えもなく間違っているのだろうと降りて話をしようとしたところ

「うわっサイテー逃げようとしてるわよ！やっちゃえ蘭！」

という声のあと突然蹴りが飛んできた。

そして撥ね飛ばされた僕は気を失い気づいたときには警察署で次の日から耐えられない尋問を受けていた。

自宅はひっくり返され女性に言えない大人のビデオを見られ軽蔑され、同じアパートの人間たちはテレビで

「いつかやると思ってた」などと面白おかしく僕の暗さを騒ぎ立てている。

警察では証拠などともに調べるつもりもないのか、いつも聴取の際には大声で脅され、家族に対する嫌がらせの内容まで話すようになっていた僕はとことん追い込まれ、強要されるがままに自白をした。いやさせられた。

シャバと呼べばいいのか警察署の外に出られた僕に待っていたのは会社からの解雇通告、お付き合いをしていた女性からの決別、そして嫌がらせを受けている実家の退去であった。

しかし一番許せなかったのはあの日私を蹴飛ばしこんな状況になる原因を作った女子高生と蹴りを飛ばしてきた本人である。

自称被害者は裁判の時に話が出来るであろう。

しかし蹴り飛ばした奴も女子高生でさらに痴漢（僕）を逮捕した原因を作ったことで警察からも表彰されていたのだ。

どうやら彼女は空手の学生チャンピオンで更には有名な探偵と弁護士娘で、更にあの時僕を蹴るよう指示していたのは鈴木財閥の娘さんだったようで大っぴらに新聞で祭り上げられていたのだ。

僕の裁判は不利を極めた。何より自白したというのが大きなファクターとして進められた。

僕の裁判を観に来た中には僕を蹴り飛ばした女の子たちが小さな子供達を連れて来たこともあった。私が捕まえた犯人！と大きな声で周りの子供を湧かせていたのを裁判官に咎められていて覚えている。

そんな中、弁護士の中でも痴漢冤罪に強い弁護士が名乗りをあげてくってから警察が証拠も取っていないことや、僕のいた場所から女性に手が届かなかったことの再現VTRまで作ってくれて更には僕が触っていないという証言者まで見つけてきてくれたのだ。

裁判は荒れた。

まともな証拠も取っていないことは明白で、更には被害者と加害者との意見の食い違いに対してまともな捜査もしておらず、またどうやら蹴り飛ばされたあとから起動していたスマホのボイスレコーダーの中に不自然に逃げようと慌てている男子高校生達の音声が残っていたのだ。

これにより痴漢事件の再捜査が始まった。幸か不幸かはわからないうが逮捕劇が有名になったのか僕の事件は話題性があり大きく取り上げられたのだった。

結果はこうだ。

被害者とされる女子高生は別の男子高校生達とつるんでおり、女子高生が痴漢被害をでっち上げ、男子高校生が相手を押さえ込む。そして大事にされたくなければと示談金をせしめていたのだ。いわゆる親父狩りに近いものだ。

被害届は出ていないが示談に関しては電車の係員室でしていたためしつかりと被害者の名前と経緯をまとめたものがあったのだ。

既に被害者は2桁に及んでいたがそんなこと警察は調べもしていなかった。

程なくして警察は僕への冤罪を認めるが、発言の強要は認めず、強

要をした刑事は退職したと嘯き、なんとか逃れようとした。

それと同時に事態の收拾を図り、マスコミに圧をかける。確かに被害者である僕と加害者たちだけの話なら話は落ち着きまた下らない下世話なニュースのひとつとなっていただろう。

しかしながら警察は冤罪にも関わらず僕を蹴り飛ばした女生徒を祭り上げている。それも両親がとても優秀な二人を…

警察は揉み消せない。何より二人の女生徒を既にヒーローとして祭り上げたのだからそれも盛大に…

結果として警察庁長官が頭を下げ、数名の人事の進退が移動したのであった。

そこからのマスコミの矛先は警察の汚点だけでなく、冤罪を見抜けず、その被害者である男性を蹴り飛ばした女性の両親にまで及んだ

まずは男親である毛利小五郎氏は事件発生直後、

「いやあ私の娘は優秀でして、また世の中の悪をひとつ解決してしまいましたかなあ！があはっはっはっ！」

と、娘を褒め称える話をしていたが、現在では

「大変失礼なことをしてしまったことを謝罪し、被害者のかたの一刻も早い社会への復帰を心から願っております。」

と、同時に娘は今回のことで大変反省しており、これ以上の取材は勘弁してください。」

と深く頭を下げ事務所兼自宅に戻っていくのだった。

次に母親である妃英理は事件直後から浮かれた様子は見受けられずにいたが真相が判つてからは娘の今後の不利にならないように金子からの被害届を出されないよう動いたり謝罪をしていたりした。

当の本人である毛利蘭は、警察に誉められ、学校でもちやほやされたのが真相がわかった途端皆が手のひら返しをしたことに怯え自宅に籠っている。しかしやれと言われたことをやり、悪い人を捕まえたんだから何が悪いのと半分開き直っていた。しかし連日続く批判的な報道などで不安になり幼馴染に解決を依頼していた…

次に鈴木財閥はというと、更に大事になっていた。

何より他人に暴力を振るわせ、自身は高みの見物をしているようにも取れる行動をしており、自分からインタビューで金子は根暗そうで痴漢すると思っていた！などと騒ぎ立てていたのだ。

事件当初は

「いやあ快活な娘さんで！」や「これだけ言える娘さんがいるとは…いやあ鈴木財閥は安泰ですな！」

などと商談先やパーティーなどで誉められていたが、真相が判明した途端反転したのだ。

「怖い怖い。冤罪をかけて空いた穴に財閥が入り込む気ですか？」

「すみませんが今回のことで何が原因で契約を切られるのかわからないので今回はちよつと…」

「あそこはワンマン経営だからな…何かあるとすぐ切られるぞ…」

など陰口を言われるだけならいいが、鈴木財閥は株式も上場しているのだ。露骨に下がる株価と更には不当な解雇も予想されるから将来の見通しが建たないと新卒の入社希望者も格段に落ち込んだ。

当の本人である鈴木園子は、鈴木財閥を継ぐ気が無いため会社関係は何も危機を感じていなかったが、同級生達からの責めるような目を怖がり暫く自宅に引きこもっていた。

そのあと金子のしたことは単純であった。刑事事件として被害届を出し、これまでの謝罪要求、更には民事にて慰謝料の請求である。

言い方はどうあれ、これ以上のことは出来ないのも事実であるため彼は出来ることを最大限しただけであった。

裁判所もほとんどの言い分を認め国からの保証も決められたのだった。

そんな中、諦めていない探偵が一人。

毛利蘭の居候、江戸川コナンであった。

「蘭は間違っちゃいねえー！」と自身の仲間である少年探偵団たちを引き連れ警察の捜査に勝手に参加していたのだ。

まず証拠が少ないことを不審に思い警察の保管している証拠品を



弄る彼らの指紋があちこちに付着し証拠として残っていた数少ないものは証拠の役割が果たせなくなった。

証拠が少ないのは単純に警察の初動が悪かっただけである。

なんとか残っていたボイスレコーダーの音声も

「でつち上げだ！」と弄り消しかけたため、証拠隠滅の疑いまでかけられた。

後になって出てきた証言に関して「脅されたんだ！」だの「お金でやってるんだ！」だの根拠もないことを言い出す始末…

更には金子の現住所を知り合いの刑事から聞き出し、自宅まで行き話が見たいと大声で騒ぐため、毛利小五郎は子供を使い金子を追い込み、なんとか示談に持ち込もうとしていると思われるようになる。

証拠の捏造や法律からなんとか毛利蘭を救おうと妃英理にあれこれ確認を頼むが全てが裏目。

全てが金子は正しく、女子高生が悪いことを示している。

この時、金子に謝罪をしていた妃英理はコナンに言われたことを金子から聞いたり、疑っていることを聞いたことをボイスレコーダーに録られており、更に印象を悪くする。

最終結果として金子の全面勝利であった。

鈴木財閥は相談役が暴れようと有名な弁護士を集めるが、集まるのは不利な証拠のみ。途中で安心してるところを社長に怒られ、鈴木財閥として謝罪することを決めた。

警察は謝罪をし、保証に関しても全面的に認めた。しかし自白の強要は未だに認めず、自白強要した警察官にも生活があるなど泣き落としをしたことから金子は呆れたのだった。既に別の課に移動になっているのだろうか。それも口に出せないような…

毛利家に関しては少し揉めた。

金子からだけでなく検察や警察からも印象が悪かったのだ。

子供を使い証拠隠滅を図ったことや接触禁止を破り謝罪や更には疑いかけたことを毛利小五郎は裁判の時に聴かされ呆然とする。妻である妃英理は優秀であるが娘に関して過剰に反応してしまった

ことについてはそこまで責める気はなかった。

しかし子供達が証拠を消そうとしたことは寝耳に水、青天の霹靂であった。自分は指示など出していないとコナン達を見ると

「だって蘭ねーちゃんを助けようよー！」

「あいつが悪いってテレビでやってたぞー！何かしたんだろー！」

等と騒ぐ始末：

小五郎は子供達への教育が出来ていないことも責められ、全てを認めるしかなかった。

当事者である二人はうつむき肅々と話を聞いているが本質的に何が悪いのかは分かっていないだろう。

金子からの裁判のなかで少年探偵団たちの妨害工作とも取れる行動に関してはコナンが煽動したとされたが、小五郎は実際に壊れたものや触って証拠とならなくなってしまった物に関しての裁判を探偵団の保護者に対して行った。それに関しては金子との話ではないので今回はない。

金子は社会に復帰しても後ろ指を指されているような気持ちが続いていた。流石に前の会社には戻れず、別の会社に就職し働いているが、勤め先で鈴木財閥関連の方と逢うと少しひりつくような感覚を覚えていた。なんとか前向きに人生を進めている金子であるが、ふと思うときがあるのだ。あの事件がわかりやすい女子高生たちじやなかったら？もし蹴りなどなく警察が隠蔽したままだったら？僕は今こうやって働いていたのかと：

今日も少し遠くから毛利探偵から依頼を受けてるであろう子供達が金子を見張っている。

接近禁止令まで出されて謝罪までさせられた彼らは何を考えているのだろうか：

少し嫌な気持ちになりながら嫌いな警察に電話をし、その嫌な警察が来るまで暫くの間、金子は自分の幸せを噛み締めるのだった。

3, We're bad guys. It's w  
hat we do.

ー空港出入口ー

コツコツコツ…

派手なハイヒールのなる音が響かせ歩く女性…そんな彼女の前に  
美女が立つ

「ハイ！まさかこんな所であなたに会えるとは思わなかったわ！」

「ヤダア！迎えに来てくれたの？イヤーン！私にはプリンちゃんとい  
う愛する彼氏がいるのに！」

「違うわよ！全くあなたが大人しくしてるよう見張れと上から言われ  
てるの」

「え〜！折角の異国で遊びたいのに〜！」

「ハイハイ、観光には付き合っただけあげるわ…」

「ヤッター！色々プリンちゃん達にお見上げ買っていかないで行けな  
いのよねえ」

「全く…貴方はもう少し危機感持ちなさいよ」

「え、何で？…ここにはあの忌々しいコウモリいないし、まあプリンちゃ  
んいないからスリルもないけど…」

「全く…RUMはなに考えてるのかしらあなた達みたいな本当のヴェ  
ランと手を組むなんて…」

「多分製薬とかの技術が欲しいんでしょ？そっちのボスからアプロー  
チしてきたのに酷い言い様！」

「ああ、なるほど…まあいいわ。それで？ホテルに荷物おいたら何処  
へ行きたいのかしら？」

「そうね…最初はベルツリーかしら！」

あ、さっき失礼なこと言ったんだからご飯は

奢ってよね！

スシーテンプラー！」

「はいはい…全く何をしに来たのやら」

「決まってるじゃない！ 仕事よ、し・ご・と！」

―阿笠宅―

その日は夏休みも入りたての暑い日だった。

工藤新一、もとい江戸川コナンと元太、光彦、歩美の少年探偵団たちは阿笠博士の家で宿題をしながら話をしていた。

「しつかりあちーなあー」

椅子に座りだらける元太。宿題は進んでいない。

「ホントだよねえ歩美日焼けしてお肌真っ赤になっちゃう」

宿題をしながら自身の腕を見て赤くなっているのを気にする歩美。宿題は順調に進んでいる。

「しよがないですよ。今日40。越えるってやってましたから…」

ジュースを飲んでいる光彦。宿題はある程度終わっている。

「オメーらが早く終わらせたいから手伝って行ってきたんだぞ。早く終わらせて自由研究の話しようぜ」

宿題は既に終わっており団扇を扇いでいるコナン

「あら、早く終わらせたいなら教えてあげたら？ 天才の江戸川コナン君？」

つつけんどんな言い方をする灰原哀。もちろん宿題は終わっている。

元太「そうだぞコナン教えろよ！ これ終わらないとかあちやんに怒られんだぞ！」

光彦「いや、元太君が怒られるのは知りませんが…今のうちある程度進めないと遊べませんしね。」

歩美「もう！ 博士ったらこんな時に私たちに出ていけなんて冷たいんだから！」

と憤慨する歩美と焦っている元太と光彦。

哀「仕方ないでしょう？ 仕事のお客さんが来るんだから。しかもよく博士がお世話になってる企業の人があるんだし、子供がいたら進む

仕事も進まないわ。」

そう、今日は博士が研究で作った特許を使い商品を開発している企業から社員が来て新しい商品の開発について打ち合わせるのだ。その為子供たちは約束の時間前には帰るよう頼まれている。

元太「けどよー別に俺らがいても話くらい出来るだろ？けちくせーな」

光彦「そうですねー。僕らが意見をだして更にいい商品を産み出せるかも知れないのに！」

歩美「そうだね！ならね！歩美お外で日焼けしないクリーム作る！」

コナン「おいおい…わかってんのかね…」

盛り上がる三人に呆れるコナン。そして優しく諭す哀

哀「あのねあなた達。これは博士と企業との秘密の約束なの。開発前の商品が何処かで話を聞いた別の会社が真似したりして博士と企業が作ったものが売れなかったら誰が悪いのか責任問題になるの。そんな秘密の話をしてるところに私たちがいたら誰が責任を取るの？」

元太「難しい話はわかんねえよ…」

光彦「灰原さん！僕たちが喋ると思ってるんですか！」

歩美「酷いよ哀ちゃん！私たちが約束守れるもん！」

哀「そういうことじゃないのよ。もし何処かから話が漏れだしたら一番疑われるのは関係ないのに話し合いの場にいた私たち。そしてその責任はあなた達の親と博士に負うのよ？それもとんでもない金額をね？小嶋くんはこれから先ずーつとうな重食べられなくてもいいのかしら？」

憤る三人を諫め分かりやすく説明した灰原になんとか納得した一向。(一人は「うな重が…食えなくなる…」と更に落ち込んでいたが)「まあ博士の発明がうまくいったらそれこそうな重でもおごってもらおうぜ！」

と励ますコナン

「ははは…頑張るがこの人数のうな重は勘弁して欲しいのお…」

と特徴的な髪型をした阿笠博士は何時もよりおしやれに気を配っているように見えた。さらに白衣もクリーニングに出しピシツとノリの効いたものに変えていた。

元太「お！博士！何時もよりパシツとしてるな！」

光彦「そうですね！なんかこう…出来る博士みたいです！」

歩美「ほんとほんと！お客さんまだでしよう何でそんなに早く準備してるの？」

阿笠「ははは…お主らなかなか酷評じゃの…」

まあ早く準備しておいて損はないからのう。ましてや今日来てくれるのはワシの商品を気に入ってくれて改良すれば大量購入を予定してるお客さんじゃからのお！」

と子供達に自慢する博士であった。

それをまたさめた目で見ているコナンと哀

哀「そんなこと言つて…今日来る予定の研究員の方が美人だから緊張してるだけよ。」

と、博士がご機嫌の理由をバラす哀。

阿笠「ちよっ！哀くん！ワシの威厳が…トホホー」

元太「まじかよ！どんなねーちゃんなんだよ博士！」

光彦「そうですね！気になります！」

歩美「歩美もー！」

一瞬で話の流れが変わり、前に商品を納めたときに取った写真を見せる博士。

そこにはブロンド髪を靡かせ、目もぱっちりとき大きい、少し小柄の女性が写っていた。

元太たちは美人だと褒め称えているなか博士が簡単に彼女のことを話す。

阿笠「彼女はハーリーン・クインゼルさんと言つてな？昔アメリカのお医者さんじゃったんじやが、今はとある企業で開発を担当しておつての？なかなか可愛らしい発明をしとつての。ワシが少し協力してあげたら気に入ってくれての。それから協力しておるのじや！」

光彦「でもお医者さんから発明家ってなんだか不思議ですね…どん

なの作っていたんですか？」

阿笠「いやなの？今の社長さんと彼女が一緒に作っておったのが病気や心の病で口を動かさなくなっただ子供達を一瞬でも笑わせられるスプレーだったり花の形をした押すと水が出てくる胸飾りとかじゃの。病気で苦しんでいる人達を笑わせたりする商品を作ったぞい？」

歩美「へえー！おもしろーい！ねえ博士、歩美その人にお話聞いてみたーい！」

光彦「そうですね！なんとかならないんですか博士ー？」

子供達の催促するような視線に困る博士。

その後ろでコナンと灰原は自分達の敵である組織の人間かどうか小声で話し合っていた。

コナン「なあ灰原、そいつって黒の組織の構成員じゃねえだろうな？」

哀「ないわね。」

コナン「なっ、なんでそんなこと言いきれんだよ…医者から開発者って怪しすぎんだろっ！」

哀「あのね、そのクインゼルさんという人はあなたが小さくなる前から博士と交流があるのよ？それに組織にいた頃彼女の名前を暗殺予定の一覧のなかでみたことあるわ。」

優秀な医者であったのにあっさりと開発者になって成功してるのが妬ましいって思ってる人からの依頼があつたらしいわ…

逆にあなたは知らないの？お隣さんでしょ？」

コナンはなにも言い返せない。自身の最大の敵はコナンや灰原を追い込むためならなんでもしてくるような気がしてるからだ。

そして自分の疑った相手がそうではないとはつきりと言いきられた時、意固地になるのも変わりなかった。

被害者は自身が産んでいることを理解しようともせず…

「あ〜！わかったわかった！わしからも子供達と話が出来るか聞いてみよう！しかし仕事のこととは別じゃ！仕事が終わる次第彼女に確認をし、君たちと合流する！それでいいじゃろ！」

子供に押しきられる形で阿笠博士は仕事相手との彼女の交流の場を作れるか確認することを約束した。

そして約束の時間が迫っていることもあり子供達に退去をさせ部屋の掃除をして客人を待っていた。

暫くすると赤いランボルギーニが敷地に入ってくる。

そこから降りてくるのは先程子供達に見せた写真の中の人物、ハーリン・クインゼルだった。

車から降りたハーリンは阿笠に向かって走りだし抱きついた。

ハーリン「Hi！お久しぶりデース！Mrアガサ〜！」

阿笠「おお！久しぶりじゃノー！元気そうで何よりじゃ！」

彼女の開発に行き詰まったことを解決してから彼女は彼氏である社長に誉められ嬉しくて阿笠には感謝しっぱなしなのである。

阿笠にとっても姪っ子のような感じにさえ感じるようになっており、先程少年探偵団たちが邪推したような邪な気持ちではなく、小綺麗なお洒落なお爺ちゃんとして見られたくて背伸びした結果であった。

ハーリン「あら！Mr？お洒落なシャツ着てるじゃない！折角のブランド品を白衣で隠すなんて勿体無いわ？」

阿笠「そういう君だって派手な格好しとらんじゃないか…」

ハーリン「それがね？Mr. Jから『仕事の際は落ち着いた服を着ときない？』って言われちゃって…ましてやジャパンならなおのことレーギサホーってうるさいでしょ？堅っ苦しくて私はジャパンには住めないわね」

と落ち着いたブルーのスーツを着た女性は茶目っ気たっぷりにお爺ちゃんに甘えるように話す。

阿笠「なるほどのお…ハーリンくんも落ち着いたのじゃなあ…社長とはまだ結婚はしとらんのかの？」

ハーリン「そうなのよ！聞いてよMr！彼ったら…」



話が長引きそうだったので彼女を家にいれお茶とお菓子を出し、愚痴を聞いていた。

ハーリーン「…てことなのよ、うーんざり。」

阿笠「ふおおおつふお…なかなか男女の関係は上手くないものじゃのお。あ、そうじゃ。ハーリーン、ワシへの依頼とはなんじやつたんじゃ？説明難しいと言うことで直接話すも日本に来たはずじゃが…」

と、仕事の話に戻した途端お菓子を食べていたハーリーンは慌てて車に戻り開発途中であろう物を見せてきた。

ハーリーン「そうだったわ私この為に来たのに…Mr？これを街のあちこちにつけて時間になったら一斉にスプレーを噴射するというのをしたいのよそれこそオフィスの窓や協会の高いところに取り付けて、他にも踏まれるような足元のところにも付けたいの踏まれても壊れないような…時間指定とか強度はクリアしたんだけど高いところに取り付けるにも一人で届かないところとかにもつけないし…それにスプレーの噴霧も範囲が狭くて…もつとこう…町中がスプレーの霧に包まれる！みたいにしたんだけど出来ないかな？街のパティーの目玉をMr. Jが引き受けちゃって…子供達も楽しみにしてくれてるんだけど…」

長文をしゃべった彼女は少し落ち込んだ様子を見せる。

それを見て阿笠は

「大丈夫じゃよ。高いところはわしの新作の伸縮自在ベルトを使ってみよう。片方を高いところに引つ搔ければボタンひとつでほほいのほーいじゃー！」

と解決策を示す。そうするとうっすらと涙すら浮かべていた彼女は

その目を爛々と輝かせ阿笠に抱きつく！

「ありがとー！これでMr. Jの顔を潰さずにすむわ！」

そのからは改良と金額の擦り合わせ、伸縮自在ベルトの試作品を渡すといった一連の流れが終わり、仕事が終わった。

「うんこれでオールクリアーね！ありがとMr！」

納得のいく商品が出来たようで満足そうな彼女は阿笠と握手をし、車に荷物を詰め込み帰り支度を始める。

そこで子供達との約束を思いだし少し慌てた阿笠は彼女を食事に誘うのだった。

「そういえばハーリーくん。君の研究に興味持った子供達がおつての？良ければその子達と少し話をしてくれんかのお？」

そういわれたハーリーンは手を止め、少し考えるように唇に手を当て考えるようなしぐさをし、返答を返す。

「ごめんなさいMr：これから別の仕事に向かわなきゃならないの。今回のジャパンへの出張で片付けたいことはたくさんあるからあまり時間もないの。ごめんなさいね？」

と、長話込みで予定を立てていたのかと少し呆れながらも阿笠は仕事ならしょうがないと彼女を送り出した。

帰り際、彼女は阿笠に言い残す

「それじゃMr！成功したら喜んで写真を又送るわ！またMr・Jが怖い格好するかもしれないから泣き笑いしてる顔かもされないけど！」

そうなのだ彼女から送られてくる治療を受けた患者たちは泣き笑いをしているが治療前だという写真と比べるといい顔をしているのだ。

彼女の車が見えなくなるまで阿笠は手を降り、見えなくなると子供達にどう伝えるか悩むのだった。

ーランボルギーニ内ー

「あー疲れた… もうこんなだっさい服さつさと着替えなきゃ！」

人気のない場所に車を止め、運転していた女性は突然洋服を脱ぎ出

した。そして際どいホットパンツ、豊満なボディーを隠しきれないピチテイーをきて髪の毛をツインテールにする。

ダッシュボードに入れておいたお気に入りのガムを口に含み、爆音で音楽をかけだす。

そして車のタッチキーを操作し車の車体の色をパープルに染める。

彼女が地元ゴツサムから彼氏におねだりして持ち出したものだ。

車のナンバーも不規則に動いたと思ったなら別の番号に変更している。無駄な科学力だ。

お気に入りの曲にお気に入りの味、お気に入りの洋服を着て彼女は満足だった。そして彼の計画に必要なアイテムも作れたのだ。

彼の役に立った！

そう思った彼女はおもむろに車のサンバイザーを下げ裏に挟んでおいた彼の写真を潤んだ瞳で見つめる。

おもむろに口紅を濃くしたかと思えば何度も写真にキスをする。幸せそうに。

うつとりと見つめていたが仕事を思いだしその格好のまま運転を始める。

キスマークの沢山ついた写真の彼は

白いメイクをし、緑色に髪を染め、不敵に笑っている。

「Mr. J…」

運転をしている女性はガンガン流れているロックのなかで彼の腕のなかで抱かれ、愛の言葉を囁かれている妄想を膨らまし、首都高を爆走するのだった。

―とある無人の倉庫―

「…ツチ！おい、ベルモット本当に来るんだろうな？」

と、長髪で銀髪、鋭い目をした男がブロンドの髪をした女性を恫喝する。しかし女性はというと柳のように追求をかわすのだった。

「知らないわよ。あの子、今日の仕事はあなた達とは関係ないから表の仕事まで口突つ込まないで！何て言っただけで私たちの監視を振り切つ

て仕事にいったのよ？彼女の彼氏からRUM宛に「女のケツ追い回して楽しいか変態野郎！」って電話まであったから手出し出来なかったのよ責めるならRUMを責めて？」

というと、長髪の男は舌打ちをし、帽子を深くかぶり直し、タバコを口に啜えた。

彼の付き人のようながっしりとした体型のサングラスをかけた男がすぐにタバコに火をつける。

待ち人は来ない。

空気が悪くなるなか、肌は浅黒く金髪をした若い男性が話を切り出す。

「あのー、僕はどうしたらいいんでしょう？ベルモットから突然呼び出された為、何がなんだか…説明してくれませんか？ウォツカ？なんならジンでも構いませんが…？」

ジンと呼ばれた長髪の男は舌打ちをし、ウォツカとベルモットに説明するよういい立ち去った。

「ベルモット、バーボンにやなにも教えてねえんですかい？」

「ええ、だって呼んだのも私の思い付きだもの。探り屋さんは彼女からどれだけ情報を取れるか、気にならない？」

「そりゃいいや、あのヤベー女からなんか聞き出せたら兄貴もお前を少しは機嫌を直すかもなあ！」

とクスクス笑い出す二人と訝しげに状況を見極めようとするバーボン。

バーボン、もとい降矢は公安警察である。黒の組織に潜入捜査をし、重大な幹部であるジンに好まれていないことも理解している。ここで少しでもポイントを稼げるのならと心のなかでうきうきしている。

「わかりました。取り敢えず今から来るのは女性でお話をしてその人から情報を得られればいいんですね？探り屋と揶揄される僕にぴったりの仕事ですね」

と笑いかけると、更に二人は大きく笑い出す

「ええ！ええ！お願いするわバーボン!？」

「頑張ってくれよなバーボン!?骨は拾ってやるよ!」

まるで失敗することが見えているような言い回しにカチンと来たが成功させればいいんだと切り替えるバーボン。

暫くするとジンも戻ってくる。すらと遠くから車の爆走する音と大音量のロックが聞こえてくる。その音は段々と大きくなり倉庫の入り口をぶち破りパープルに染まったランボルギーニが入ってきた。

ブレーキの音が響くとバーボンの目の前でなんとか車は止まった。エンジンを停めたのか音楽も止まり、静寂が訪れる。そんな中、ランボルギーニのフルスモークの扉が開き女性が降りてくる。

ピッチリとしたサイズ小さめのTシャツ

もうお尻がはみ出るのではないかというホットパンツ

そして髪の毛をツインテールにしている女性

カツカツとハイヒールが響くなら彼女は飲み物を飲みながら手にはお菓子を抱えている。

少し黙って回りの様子が芳しくないのを見て誤魔化すかのようにおどけた口調で飲んでいた飲み物を前にだし

「は、ハーイー…:時間には間に合わなかったけど…:タピオカミルクティ…:飲む?」

完全に空気を読み違えた発言であった、ジンとウオツカ、ベルモツトは呆れるなか、タピオカミルクティを差し出されたバーボンは呆気にとられていた。

「さあ取り敢えず仕事の話だ。頼んだもんは持って来てんだろうな…:

ハーレイ?」

ジンは呆れながらもさっさと仕事を終わらせるため頼んでいたものを渡すように伝える。

ハーレイはぶつくさと文句をいいながら品物を渡し、現金も預かった。

バーボンはハーレイという単語が何か思い出せなかった。一人思考の海に陥っていると

「そっぴゃいっつがお前と話したがってたぜハーレイ?」

「そうね、今日は彼が相手になつてくれるわよ？」

「ほう、そりやいい頼んだぜバーボン…」

ウオツカやベルモットが茶化しながら車に戻るのを見てジンも少し面白そうにウオツカの運転する車に戻った。

差し出していたタピオカミルクティを飲まないのを見てまた自分で飲みだしたハーレイはバーボンを覗きこむ。

「な、なんでしょう？僕の顔、そんなに珍しいですか？」

自分の顔が整っている自覚があるバーボンは結局女か…と心の中で軽く観出した途端、

「つまらない顔してるね…」

と呟かれる

「はっ…」

また呆気にとられるバーボン。ハーレイは構わず好き放題い放つ。

「なんていうかイケメンですよ？僕に惚れるの当たり前って顔してる。気持ちわるっ。あなたが苦手な顔のやつがそんな事思ってたら気持ち悪いでしょ？そんな感じ。」

なんか僕は正しいんだ！ってかんじが私の嫌いなやつそっくりウゲー思い出したら吐きそう…ゲロゲロ…」

言いたいだけ言うと彼女は気持ち悪そうにバーボンを見ている。

少しムツとなりながらもバーボンは情報を引き出そうと頑張るところにした。

「失礼なお人だなあ…まあ、合う合わないがありますから何も否定はしません…」

さつきジンと取引していたのは何です？」

既にバーボンを見ることをやめ、お菓子とジュースを飲み食いし出していた彼女はあつけらかんと

「爆弾よ？特別製のね？」

と答える…

バーボン「ば、爆弾!？」

ハーレイ「そうよ？割りと面白くできたから売りに出したらこの組

織が買ってくれたの！」

バーボン「それはどのような!？」

ハーレイ「ええ…さっきの目の鋭いお兄さんに聞いたら？」

バーボン「彼に僕は嫌われているから教えてくれませんかよ…」

ハーレイ「ええ…いつそ迫ってみれば?『僕の体をあげますから』つて!あのごつつい野郎より絵になるわ!」

バーボン「いやそれは…ところで中身が知りたいのですが…」

ハーレイ「ええ、ノリ悪いのね…なおのことおーしえない!」

バーボン「貴女は爆弾でどれだけの被害が出るのか分かっているのか!中身を!教えてくれ!」

焦るバーボンは大声で責め立てるようにハーレイに訴えた。

それを見たハーレイは少し驚いたような顔をするが、すぐに冷めた目で彼を見るようになった。

ハーレイ「…あくあ冷めちゃった。そんだけ気になるなら教えてあげるわ。」

バーボンを見ながらにやにやとするハーレイを見て降矢もイライラしていた。

彼の本職である仕事に関係するのではないかとハラハラしているのだ。

ハーレイ「中身わね…」

顔をズズイツと降矢に近づけ、

「おーしえない!」

どこからか出したバラの花が水鉄砲になっていたのだろう、降矢は突然水をかけられた。

ハーレイは降矢が驚く顔を見て楽しそうに車に戻りエンジンをかける。

「おい!待って!」

慌てる降矢だが車の奏でる爆音で自身の声が届いていない。

彼女は少し音楽のボリュームをさげ彼に言葉を投げ掛ける。

「やっぱ気持ち悪いよあんた。ほーんとバツツそつくり…自分は正義の味方でございって顔してるけど、こんなところにいる時点で同じ穴の貉だよ。」

あ、最後に聞きたかったこと教えてあげるの中に入ってるのはガスよ？でも安心して？笑顔になるだけのガスだから…うふふ貴方も笑ったら smile!」

それだけいい放つとハーレイは去っていった。

少しして正気を取り戻した彼は自分の部下に指示を出す。

「ハーレイと言う女を調べろ！そして ガス 笑い というキーワードで過去に問題がなかったか調べてくれ」

電話先の部下は少し戸惑った様子で上司と会話をする。

「あの…降矢さん。あります」

「でかした風見！すぐに僕の端末に情報を送ってくれ！」

「いやあの…これは公安だけに負える問題じゃないです。」

「っ！どういことだ風見！」

「ガス、笑いというのは…恐らく笑気ガスです。アメリカのゴツサムという都市で数年前に発生した事件で、そのガスを吸うと笑いが止まらなくなりそのうち酸素が足らなくなり笑顔のまんま死んでいくという恐ろしいガスだと思われれます。」

「なん…だと…」

「そしてそのガスを造りだし…街にばら蒔いたのが…」

キリングジョーク「ジョーカー」  
と

彼の娼婦 「ハーレイクイン」

です。

どちらもアメリカのS級犯罪者です。捕まえるとなるとアメリカ



からの協力も考えて…」「…けるな」…?ふ、降矢さん?」

降矢はキレていた

「ふざけるな!そんなやつが何故日本へ?そんな情報回ってきていないぞ!?!?どういうことだ…」

…風見すぐにCIAに連絡しろ。FBIはダメだ。確認が取れ次第僕に連絡しろ。わかったな!」

そう言うだけ言うと乱暴に電話を切り、自身の車に飛び乗りセーフハウスにて情報を整理するのだった。

自身に付けられた盗聴器に気もつかないくらい慌てていたのだった。

ーランボルギーニー

「あくあやっぱポリスよね…気持ちわるかったのよねえ…」

盗聴器をつけたのは一瞬、近寄り水をかけ、驚いた隙につけたのだ。

「やっぱあのハゲのやつ、貰っておいて正解だったわ…」

ゴツサムで悪事を働いていたときデッドショットというヴィランから使えそうなアイテムを巻き上げたのだ。今回使用したのは超小型盗聴器。

独り言を言った後、むなしくなってきたハーレイはポリウムをあげホテルに向けてスピードをあげるのだった。

信号でふと止まったときサンバイザーをおろし、また彼の写真にキスをする。

「待っててねプリンちゃん…ハーレイがもうすぐ帰りますからね…」

信号が変わりゆっくりとしたスピードで動く渋滞を見てうんざりしたハーレイは歩道をスピードを出し走り始めた。

「でも帰る前にお土産用意しなきゃ…うん!そうよね!」

歩道を走る車を避けて人が慌てふためいている。暫くすると進路をパトカーに塞がれた。

「こらー!降りてきなさい!これだけの騒ぎになってんのよ?運転手

のあんた覚悟できてんのよね？スモークまで貼りやがって…車検も通つてないだろこれ！いいから降りてきなさい！」

ロン毛の婦警が怒鳴っている

その後ろに小さく2つ髪を結んでいる若い婦警が同行している。

彼女らは降りるように責め立てる。

悲しくなってきたハーレイはまた彼の写真を見る…

彼が笑いかけてる気がする…

彼の声が聞こえる…

「my sweet」

ハーレイはまた写真に口づけするそれを激しく…

外では降りてこない運転手にキレた婦警がドアを割ろうとするのを止められていた。もう一人の婦警は応援を呼んでいるのだろう…

ハーレイはもう悲しくない。

だって彼に愛されているから！

邪魔なものは排除すればいいから！

停まっていたランボルギーニのアクセルを思い切り踏み込み後ろに下がる。回りの野次馬が突然動き出したランボルギーニに引かれようが関係はない。

だって愛があるから！

少し下がったランボルギーニは更にスピードをあげ正面のミニパトに突っ込む。

止まらない。

彼女は愛があるから止まらない。

また、周りがどれだけ迷惑を被ろうが気にしない…  
だって

W e , r e b a d g u y s . I t , s w h a t w e  
d o .

私たちは悪人よ。これが私たちのやることなの

ハーレイは逃げ切りホテルに入る。

車体の色もナンバーも戻し翌日には帰るのだった。

降矢がハーレイの帰国を知ったのはゴツサムで悪事を働いている  
ことがわかってからであった。

#### 4、工藤優作は選ばれない

工藤優作は弱っている。

過去に自身の失敗で右目と左耳を失った彼は、戒めとして小説を出すことを暫く止めたのだ。

当然あちこちの出版社と揉めたが、取り敢えず現状続けている原稿をしつかり終わらせ、シリーズも打ちきってまた、本を出すようになったら再出発として新人と同じ扱いを受けることを了承し休業したのだ。

彼の妻は当時病院で私が追い込んだ被害者で、加害者でもある女性に憤慨していたが、彼女がミンチ状態で警察に運び込まれたのを目撃し嘔吐。そして優作と新一の所業を聞き、また家族は悪くないと騒ぎ立てた。友人の弁護士まで雇い、被害者の祖父に謝罪をし示談を申し込んだりしていたようだが後の祭り、世間は許してくれなかった。

そんななかでの休業はなかなか受け入れられなかったが、今まで優作が出した小説のシリーズの印税があり、数年は働かなくてよかったのだ。

気分転換を兼ねて休業をしていた優作にスコットランドの知り合いからパーティーの招待状が届く。

向こうではなかなか名の知れた警察関係者であり、イギリスにも久しぶりに行けると準備を始める。

残念ながら彼の妻は過去にお世話になった芸能関係者からお声がかかり、イギリスには行けそうもない。

息子は：そもそも今の状況じゃパスポートも取れない。

その為彼は一人でスコットランドに向かうのだった。

スコットランドでのパーティーは中々に豪華だった。

何より知性溢れるやり取り、清廉な話など心が落ち着くような話が多かった。

昔と違い目に眼帯をし、片耳が潰れていることに過去の知り合いは驚いているが、彼らは憐れみの色を見せるが深く聞かずに明るく話を

続けるのだった。

パーティーの翌日、これから数日今後書く小説のネタ集めも兼ねて優作はスコットランドに残る予定だった。

街に繰り出そうと準備をしていたとき、パーティーに誘ってきた知人から連絡がくる。

警察署にくるよう言われた彼は知人の待つ会議室に通される。

話を聞くと同席している刑事。ハウイの元に行方不明の娘を探してほしいという手紙が届いたらしい。

ある島から届いたその手紙には行方不明とされる少女の写真が入っていた。

優作は手紙の届けられ主であるハウイに協力してほしいという知人の依頼に二つ返事で協力することを約束する。

その島は

## サマーアイル島

―優作―

「なんというか…牧歌的な島だね…」

「ハッハッハッ！島なんてどこもこんな感じですよ！」

同行者であるハウイくんは敬虔なクリスチャンであるようで穏やかな人柄と情熱的な考え方を持つ渋い青年である。

船に乗り、島に向かう道中も彼の考え方について話をすると中々に興味深いものがあり、今後の私の小説のキャラクターとしても使えそうだ。

そしてこの島の謎が私を満たせるだけの謎であれば…と心が沸き立つのを押されられない

既に自身の失敗で痛め付けられていることを忘れ新しい謎に心踊っている優作であった。

二人が島に上陸し、最初に向かった先はパブであった。上陸したのが夜であったこともあるのか、パブはなかなか盛況しているようであり、しげな声が外にまで漏れ出ていた。

中に入るとどうやら下世話な歌を客達が歌っていたようだ。ハウイは怒りを抑え、優作は面白そうにするなか、パブのオーナー達に少女についての話を聞き出す。

そんな中、パブのオーナーの娘が出てくるとパブの客たちは一層のこと下世話な歌を歌い出した。日本で言えば芸人の歌う「大きなイチモツの歌」をもつと直接的な表現をしたかのような歌にハウイは怒り外に出てしまう。

敬虔なクリスチャンにとって奔放な性を謳歌しているような彼らとは考え方が相容れないのだ。

ハウイを追いかけ、外に出た優作とハウイはそこでまた闇夜に紛れ性を謳歌するカップルが多いことに目を丸くする。

弱ってしまったハウイと共にパブに戻り、二階の部屋を借り休む二人。もちろん別室である。

休もうとするハウイは隣の部屋からなにやら音がする為眠れず、音の正体を確かめるため部屋を確認する。

その部屋はパブのオーナーの娘の部屋であり、彼女はその肢体をあられもなく出し踊っていた。妖艶な彼女に目を奪われるハウイであったが、クリスチャンの誓いを思いだし、誘惑に耐える。

別室の優作も誰かが部屋に入ってきたことに目を覚ますと、こちらにも扇情的な格好をした女性が踊り出す。

パブのサービスだと優作に迫ろうとするが、既婚者である彼はなんとかその誘惑に打ち勝ち彼女を部屋から追い出した。

次の日、お互いがあまりいい眠りをできなかったのだと理解した優作とハウイは朝食をとりながら今後の打ち合わせをする。

二手に別れて聞き込みを始めることとなった。

二手に別れた瞬間、ハワイはパブのオーナーの娘に捕まり

「昨日はなんで部屋に来なかつたの？誘つてたのに…」

と、また扇情的に迫られるものの、

「僕には婚約者がいるー」と強く拒む。

それに少し驚いた彼女はクスクスと笑い

「お堅いのね」

と言つてパブのなかに戻つていった。

ハワイは敬虔すぎて女性との経験はない。妻となつた女性とだけという戒律を守りチェリーを守つていたのだ。

憤るハワイはどうか落ち着き島の人たちに聞き込みを開始するのだ。

村の一角には明後日行われる祭りのために大きな見世物があると  
いうことで囲いをされたものがあるが嚴重に見張られており中を確  
認することはできない。村の人たちからは明後日には観れるんだか  
らと咎められ覗くことを諦めた。

二人が聞き込みを初めて数時間合流した彼らは情報の交換を行う。

優作「やれやれ…なんとも不思議な島だね…村人は大半が農業従事  
者でほぼ自給自足だ。しかしこの少女に関しては誰も知らない。」

ハワイ「そちらもですか…僕にとつてはあまりいい島ではないです  
ね。その、あまりにも開放的すぎて…」

島としては自給自足状態などありふれた話なのだ。しかし宗教生  
活や性生活だけは他のイギリス人と異なつていた。どうにもオーブ  
ン過ぎるのだ。

彼らは生まれ変わりを信じ、太陽を信仰し、子供たちに生殖と豊作  
を願うための性的なまじないを教え、大人たちは裸で性的な儀式に率  
先して参加していた。

クリスマスチャンであるハワイには毒でしかなく、クリスマスチャンでない  
優作にとつてもなかなか男として辛いものがあつた。

ハワイ「しかし墓地でこの少女のお墓を見つけましたよ。」

ハワイは聞き込みの際、少女など知らぬという住人たちからお墓の  
場所を教えてもらい向かうと、行方不明である少女の名前がかかれた

お墓を見つけていたのだ。

それを聞いた優作と共に確認するとやはり少女は島の住人であり、ごく最近死んだことがわかった。

実際にお墓を観たいと言う優作を連れ墓場に向かうとそこには確かに少女の名前のかかれたお墓に木が植えられておりまだ小さい木には何かの干からびた内臓のようなものが巻かれていた。

不気味な光景に優作は心踊っていた。見たこともない謎に、それを隠蔽している村人。彼のなかで様々な推論が駆け巡る。

ハウイもどういふことか考えていると島の領主の使いだというのが現れ領主の家に誘われる。

毘かと身構えるハウイと謎を解決するために乗り込もうとする優作。結局は優作の推理力を信用し領主の元に向かったのだった。

領主の家は大きい家と言うくらいで贅沢な生活を行っているような気配はない。

「いかがですかこの島は？」

領主は村人に少女を探す島の外からの二人に興味があつて呼んだことを告げ、村の感想を聞きたがる。

「なかなか牧歌的でいい島ですな…」

余裕を見せる優作と

「申し訳ないが行方不明の少女を探しているんだ。この村にいたことは分かっている。」

と、キレ気味なハウイ

「それは申し訳ない。」

と領主は謝り、この島について説明してくれたのだった。

もともとこのサマーアイランド島はキリスト教徒が移住していた土地であつたらしい。しかし様々な災害が続き生活は苦しくなつていった。

そんな中、キリスト教を捨てて古代の宗教儀式に戻つたところ、たちまち島は豊かになつたそうだ。



クリスチャンであるハウイにとってもなかなか衝撃的な話であるが、優作はその宗教こそが謎を解く鍵なのだと言わくわくしていた。その後他愛もない話をし、二人が帰ろうとしたその時、領主が少女の墓を掘り返してもいいという。

二人は墓場に急ぎ、掘り返すと、墓にはウサギの死体が入っていた。

次の日、聞き込みと証拠を集めるなか、優作は少女が去年のお祭りの写真に写り込んでいるのを見つける。

写真や証言を集めると彼女は村のために生け贄にされるため、どこかに隠されているのではと考え付いた。

ハウイもこれに同意し、それは祭りの時に行われ、現在少女は村の一角にあった嚴重な建造物にいるのではと当たりをつけるがなかなか監視が外れることもなく仕方なく明日、祭の際、どさくさに紛れて少女を救う算段を立てる。

ハウイは応援を呼び船を島まで呼んでおくよう手配していた。

優作は今回の謎についてノートに纏めていく。

そのなかでいくつか謎が残っていることに興奮している。

すべては彼等が信仰している宗教に関係していることがわかる。

わかるが、それが何なのかわからない。

二人が慌ただしくしていたとき、突然二人は村人に呼び出される。

計画がばれたのかと少し慌てていたが話を聞くと

明日の祭の先導者に当たる愚か者の役を二人にやってもらいたいと頼まれたのであった。

村人は基本儀式の場所まで愚か者の後ろしか着いていけないということを聞き、少女を助けるのには好都合だと、その役を受けるのであった。

翌日儀式の場所から一直線で走れば乗れるところに船と仲間が隠れているのを確認した二人は、愚か者の衣装を着て町から儀式の場所まで練り歩く。

儀式のための衣装だろう。豚や兎、鶏の被り物をしたものたちが優作達のすぐ後ろにつき、その後ろを住人たちが嬉しそうについて歩く。

そして儀式の場につき、皆思い思いに準備を始める中、予想通り行方不明だった少女が現れた。

一瞬だった優作より近くにいたハウイが少女を抱き船に向かい一直線に走り始めた！

優作もほぼ同時に走り始めたが少女を抱えている分ハウイが遅れ始める。船に着く迄に村人たちに追い付かれるようなことは無さそうである。

そこで優作は先に船に到着し船を乗りやすいように仲間たちに呼びかけるためスピードをあげ一人先に船に向かった。

「おいっ！もうハウイが着く！用意してくれ！」と船に乗り込む優作に

「ええー！もう準備は終わりました！」

と答える警官：よし！と思った瞬間、

優作は首筋に何かを打ち込まれ動けなくなった。そのまま倒れ込み警官を睨み付けるが、警官はにこにここと笑い船を出すのだった。

ハウイは茫然とした：

優作が先に船に向かったのは私を助けるためだったというかとは理解している。

数日ではあるが彼と共に捜査するなかで彼がそんな不義理を行う人物ではないことを理解している。

では何故

ワタシハオイテイカレタノカ：

そして突然抱き抱えていた少女がハワイの首筋に注射をうつ。

突然のことに茫然とするハワイを追い付いた村人たちは嬉しそうに抱き抱える。

体は動かない。

叫べるが、叫びは…届かない。

優作は船を操縦する警官を睨み付ける。

「ど、どういうことかなこれは？」

言葉は発せられるようだ。

優作の質問に気づいた彼は少し悩むフリを見せ、操縦しながら話し始める。

「いやね？僕もあの島出身でして、彼処には知り合いもいて今日の祭りは成功してくれなきゃ困らんですよ」

と軽い感じで話し始める。

体を起こされ椅子にもたれるように座られた優作は大声で怒鳴る

「それは！小さな少女を犠牲にしても行うようなことなのか！君たちには人を敬う気持ちはないのか！」

小さな少女の犠牲の上で何が幸せなど成り立つのかと熱弁する。

呆気にとられた様子の警官は言いたいことを言いならむだけとなった優作を大声で笑い始める。

「っ！何がおかしい！」

優作は体は動かさえないながらも手を出してこない警官を怒鳴り付ける。

警官はひとしきり笑い続けたあと、また話し始める。

「はあー笑った笑った！プククツw『少女を犠牲にく』だって！あくあもう話してもいいって言われてるしいつか。」

警官は船を島の反対側、儀式の場が見える位置に動かしながら話し

始める。

「あのねMr. 工藤？俺たちが求めていた供物って

君たちのどちらかだよ？」

風が凧いだ気がした。音が消えた気がした。

優作は何をいつてるのがわからない。

警官は話続ける。

貴方達を呼んだのは作爲的。供物とされる人間には条件があるんだ。

まず他所から自主的に来た人であること。ハワイにはそのために郵便を送った。

あんたはその謎を解くためについてきた人だ。

次に、淫蕩（いらやしいこと）に陥らない人だ。だからあんたたちにモーションをかけさせた。二人とも手込めにしようとしなからみんな喜んだぜ？

最後に勇気あることだ。そう、行方不明だった少女も此方側の住人なんだよ。彼女を救ったハワイさんは供物に選ばれ、あんたは最後に選ばれなかったんだよ。

下手したら初めての二人も供物に捧げられる！って盛り上がってたんだけだなあ…

そこまで言うと言と船を止め、警官は島の方を見る。

優作は打ち込まれた薬のせいかわ、首も動かさない状態となっており、島の方を見ることはできなかった。

「…私をどうするつもりだ……：ハウイはどうなるんだ……」

絞り出せたのはこんな言葉だった。優作は目線だけは警官から離さず、睨み付けている。

感慨深そうに顎を擦っていた警官は優作の目の前にしやがみ目線を合わせ、話し始める。

「うーん……まずはハウイ捜査官からかな……今君も受けるはずだった責め苦を受けているよ？ 供物になる前準備だね。最後は……まあわかるよ……」

貴方は帰すよ？ 自国に安全にね？

あつ！ その不思議そうな目！ 疑ってるでしょ！ でも私達は供物以外に手を出しちやいけないし、貴女は供物を選ばせてくれた選別者でもあるからね。」

それを聞いた優作は本島に戻り次第知人やマスコミに情報をばら蒔くことを考えるが

「多分貴方が考えているような警察とかマスコミが介入することはないし、そんなことしたら工藤さん、貴方本当に殺されるよ？」

と警官は軽い口調で話す。

優作はハツとした。行方不明の少女の死亡手続きが受理されていたことや目の前にいる警官を出したことから……

この島の祭りは国が認めているという結論に至ったのだ。

そう、蓋を開ければ彼も供物の候補として呼ばれた一人であった。それは知人だと思っていた男が呼び寄せていた。

島の総意としてはハウイを呼び出すことに決めていたが、優作もまさかの参加を示したため、どちらかが決まりを破った段階でもう片方を供物にするという話になっていたが、なかなか上手く行かず、どうせなら二人とも供物に！ と話が固まっていた最後にこういう結果になったのだ。

「お、見えた見えた！ Mr. 工藤！ あれが俺たちの祭の最後だ！」

椅子の向きを変えられ見た島の儀式の場には巨大な藁人形のような巨人が存在していた。

優作はやつと宗教が判明し恐ろしくなり震えだした。

「あれな！アメリカの方にも似たようなやつあつてあつちは『バーニングマン』つて言うんだつてな！よく見ておいてくださいね！神に供物が届けられる神事を！」

目を背けようにも首が動かない。

まぶたを閉じようにも警官に無理矢理開かれている。

ああ、見える…巨人の腹の部分にハウイが押し込められるのを…

ああ、見えてしまう…巨人に火が付けられるのを…

ああ、聞こえてしまう…ハウイが、ハウイの他に供物にされている動物達の叫び声が…

ああ、聞こえる…ハウイの主に救済を求める声が…

ー神様助けて下さい！神様お許しを！神様！…！

燃えていくハウイが…巨人が…

巨人の足元では村人たちが楽しそうに歌を歌い踊っているのが見える。

燃える巨人が作り出す大きな炎でそれは幻想的でとても恐ろしく感じた。

巨人が燃え尽きた後、優作は本島に戻った。

暫く病院に入り様子を見ていたが、ある日突然知人や警察にあつたことを話し始める。

知人はだから？という目をし、警察は取り合わなかった。

優作は警察にも疑心を持ち、予定より早く日本に帰国する。

そして彼は日本の警察や知人に相談するが、面白い話だと小説の内容だと受け止められてしまう。

そして彼は数カ月後、自粛していた執筆をし、一冊のカルト的な小説を書き上げる。

世間からは

工藤優作の意欲作

だとか

自粛中にたまった鬱憤を晴らすためのとんでもない作品などと言われ騒がれるが実話であることは誰に話しても信じてくれない。

実際彼の子供に読ませたところ、

「現代社会でこんな事するわけねえだろ？父さんもホラー的な作品書けるようになったんだな」

と笑われる始末であった。

違うのだ。自身の経験を更に理解してもらうためには書くしかないのだ：

取りつかれたようにあの事件について書き記す優作の顔は

笑みに溢れていた。

優作は取り付かれていたのだろう。

それを知っているのは彼に船の上で同乗していた警官のみである。

彼は見たのだ。

優作に巨人を見せたとき

彼の目は輝いていたのだから

彼は優作の目等広げていなかった。

優作が全てを見ようと、理解しようとして見開いていたのである。

第一稿が販売された後でも優作は添削を繰り返し、優作の他のシリーズとは違い、新版が出る度に恐ろしく深くなっていく本だと話題になっている。

そんな優作のもとには毎年4月の終わり頃、丁度向こうで祭りが行われる少し前から、スコットランドより行方不明を探す以来が舞い込んでいた。

それも封筒で、ハワイを呼び出す時のように少女の写真ではなく、島の住人が嬉しそうな表情で踊っている所の写真が同封され…

優作はそれを見て、暗い気持ちになりながらもまた同じ作品の推敲を行うのだった。

それは妻でも止められぬ奇行でもあった。

妻はそんな夫を気遣い気分転換にスコットランドに向かうことを提案すると、飛び上がり目を爛々と輝かせるが、すぐに、行かない方がいいと却下するのだった。

あの日、優作は囚われたのだろう。

異教の神に

供物となったハワイはどんな気持ちだったのだろう…

あの島の住人たちはどんなに幸せなのだろうか…

そんな事を考える彼は既に過去の自身の失敗等消え去り、いつかハワイの気持ちが変わる日がくることを願い、日々生きていくのだった



⋮

幕間・野に咲く花のように――子供たちに憤慨したの  
で

夏の暑い日も過ぎ少し涼しくなってきた頃、コナンたちは公園に来ていた。

夏休みの課題の1つである写生を終わらせるため公園の風景を書くことになったのだ。

元太「よーし！、すげえ絵を描くぜえ！俺はあの猫だ！」

大声で寝ていた猫を指差す元太であったが大声でビツクリしたのか猫は逃げてしまった。

それを笑う少年探偵団とコナン、灰原。

「……！笑うなよ！」

地団駄を踏む元太。

光彦「だって元太くんwあれだけ大声を出せば猫だって逃げますよ！」

歩美「そうよ！それに絵を描いてる間猫ちゃんも動くかもしれないのにどうやってずっと動かないでもらうの……？w」

少年探偵団がからかっているのを笑いながら見ているコナンが絵を描くことを促そうとした時、

「いったー……いんだな！」

悲鳴と独特の語尾が響いた。

何だろうと子供たちは声が聞こえた方に向かうと、指を咥え涙目の男性と、ウインナーを美味しそうに食べている猫がいた。どうやら猫におかずを盗られたようだ。

男性を見ると短く刈り上げた坊主頭に、ランニングシャツと半ズボン。スリッパを履いた出で立ちで、持ち物を見るとリュックに傘とス

ケッチブックが見える。あとは手元におにぎりと少しおかずが入ったタツパーがあり、食事中だったことがわかる。

どう見てもいい大人がする格好ではないため、コナンは子供たちに近寄らないよう小声で話しかけようとする、既に元太たちは話しかけていた。

歩美「ねーねーここで何してたの？ねこさんとご飯ー？」

元太「うまそうなお握りだな！ひとつくれよ！」

光彦「駄目ですよ元太くん！歩美ちゃん！こんなところでご飯を食べているんです！この人は浮浪者ってやつですよ！」

興味を持つ二人に大声で浮浪者だと決めつけ慌てて止めようとする光彦。

コナン「そうだお前ら下がれ！」

お握りを奪おうとしていた元太はその拍子にお握りを落としてしまふ。

コナンが一喝すると探偵団はコナンの後ろに逃げ込む。

そこまでの流れをポカンと見ていた男性は少しすると立ち上がり地団駄を踏む

「ぼ、僕は『ルンペン』じゃないんだな！失礼なんだな！」

と、顔を真っ赤にして少年たちに反論している。

元太「る、るんぺんてなんだ？食い物か？」

光彦「さ、さあ？どこか別の国の人なんでしょうか？…」

と慌てる探偵団。

それを見ていた灰原が説明に入る。

灰原「ルンペン…ドイツ語の Lumpen…つまり襤褸や古着を意味する言葉が転じて『浮浪者』って意味の差別的な言い方ね。

つまり彼は浮浪者じゃないって怒ってるのよ。」

前時代的な言い回しで怒っているおじさん…とも呼べる歳の男性をコナンはよく見てみる。

髪の毛はしっかりとバリカンで刈ったように生え揃っていて、ランニングシャツと半ズボンも公園で座って土が付いたところ以

外は汚れも見えない。

リュックはしっかりとした造りで有名なブランドもので年季は入っているものの手入れがされているのは目に見える。

更にはお握りもおかずも今日作られたのだろう。傷んだ様子は見受けられなかった。

それを見たコナンは子供声を出し、謝る…

「ご免なさいおじさん。こんなところでごはん食べてるから変な人かと思っちゃった…でもこんなところでごはん食べたら怪しまれてもおかしくないよ?」

と、謝ると見せかけ責任を男に押し付けたのだった。

確かに公園の奥で、人に見つからないような所でご飯を食べていたのは怪しいが…

「ふ、ふん。こ、この公園は何処でご飯食べても問題ないって、か、か、管理人にか、か、確認しているんだな!ご、ごみだつてちゃんと持って帰るんだな!」

と、顔をコナン達に向けずに反論をする。

そう、彼はしっかりとルールを確認した上でご飯を食べていたのだ。

そうになると反論の余地もない彼らは

「ご、ごめんなさい」

灰原以外の四人はなにも言い返せず謝ったのだった。

「本当にご免なさいね?この子達が失礼なことをして…」

と灰原が謝ると、男性もぼつの悪そうに

「き、君が謝ることは、な、ないんだな…君はぼ、ぼくに嫌なことはしていないんで…あ、あの子達はし、しつれいだったから僕も強く言ったのかも…ご、ごめんね?」

彼女が謝る事はないことを伝え会話が成立していることに嬉しそうに謝罪を述べた。

それを見ていた三人は少しまた男性を怪しむ。

元太「なあ…あのおっさん灰原とは嬉しそうに話してねえか?」

歩美「ほんとほんと!歩美たちだつて謝ったのに…」

光彦「怪しいですね…本当はあの人、灰原さんに気のあるロリコンの人かも…！」

等と小声で話す。

聞こえていたコナンはあきれた口調で説明する

「あのなあ…お前らだつて突然話しかけられて、弁当くれって言われたり、犯罪者だつて言われたら嫌な気分になるだろ？」

それを聞きまた黙り混む三人。

しかしながらコナン自身も謝ったのに怒られたことにまだイラついていたが、

「なに言ってるのよ。貴方も反省しなさい江戸川くん。彼はルールを守って食事をしていただけなのに因縁つけられたのよ？それも相手が怒る原因じゃなくて？」

男性との会話も一段落し、コナンが子供をたしなめるのを聞き、本人は反省してないことを責める灰原。

コナンはヤバツ！バレた！という顔をし誤魔化す。

「い、いいんだな、あいちゃん。ぼ、ぼ、僕はもういくから、へ、変な子供たちに怒られたことなんて忘れるんだな…」

そう言うとき男は荷物を纏め、リュックを担ぎ、傘をリュックにさし、スケッチブックを脇に抱え、立ち去ろうとする。

まともに謝罪が出来ていないと慌てる灰原と、変な子供と言われた子供達も謝らないと慌てる。

慌てるコナンは元太が落としたお握りを見て閃いた。

「おじさんご免なさい！お握り落としてお腹すいてるよね！良かったらご飯作ってもらおうから一緒に食べない？」

長い沈黙のあと

「お握りなら…」

と男をなんとか連れていくことに成功した彼らは頼りになる兄貴分がいる喫茶ポアロに向かうのだった。

ポアロに向かう道中、男は灰原としか話をしなかった。まともに謝れてもいない4人が話しかけてもほとんど返答はない。

「そういえばおじさん、お名前は？まだ伺ってなかったわよね？」

と灰原が聞くと

男は少しドモリながら答える。まるで兵隊のようにピシツと姿勢を正すと

「ぼ、僕の名前はき、き、きよしです。よ、よ、よろしくおねがいします。」

と答えるとまた姿勢を楽にし、灰原の横を歩き始めた。

こうしてキヨシはコナン達に連れられポアロに向かうのだった。

―喫茶ポアロ―

チリンチリンと入り口のチャイムが鳴る

「いらつしやいませー！つてコナンくんと皆、いらつしやい。」

ポアロの店員、榎本梓は喫茶店の上の階に住んでいる江戸川コナンとその友人達を快く迎えた。

その後ろには少し挙動が怪しいがどこか厳つく、どこか愛嬌のある男性が立っていた。

「えつと…お客様ですか？」

思わず確認してしまった梓に、男性の挙動は更に怪しくなる。

そうすると更に慌てたコナンが梓に説明に入る。

「梓姉ちゃん！僕たちこの人に酷いこと言っちゃってその時にご飯台無しにしちゃったんだ…だからなんとかご飯食べさせてあげたいんだけど…駄目？」

と少し甘えた口調で頼むコナン。

事情を把握した梓は男性を受け入れ椅子に座るよう進める。

その際灰原におしりが土で汚れていることを指摘されていたので座面にタオルを敷きその上に座ってもらった。

男性は姿勢よく椅子に座り、物珍しそうに周りを見渡していた。

「は、は、ハイカラなお店なんだな…」

「そんなハイカラだなんて、それよりもこの子達が失礼をしたみたいで…食べたいもの何でも言っってくださいね！」

男性と子供たちにお水を出しながら梓は注文を取る。

歩美「梓さん。きよしさんはお握り食べたいんだってー!」

光彦「元太くんが落としちゃって食べれませんでしたからね。」

元太「うっせーな…落としかたくて落としたんじゃないやねえよ。コナンが大声だすから…」

子供達は大声できよしの希望を通す。責任はコナンに押し付けながら

少しあきれたコナンはお店を見渡し、頼りにしてた男性がいないことに気づく。

「そういえば、安室の兄ちゃんは？」

梓に聞くと

「買い出しよー。今日はお客さん多かったから夕方の方の材料足りなくなりましたから頼んだの。多分もうすぐ帰ってくるわ。」

注文を受けてお握りを作りながらコナンの質問に答える。

お握り二つとお新香、卵焼きがきよしのもとに出されている

「い、いただきます。」

きよしは嬉しそうにお握りにかぶりつき、卵焼きやお新香も食べていく。そして食べ終わると

「ご、ご、ごちそうさまです。」

お、お姉さん、有難うございます。」

と、深々と頭を下げるのだった。

一段落すると子供達はきよしにあれこれ話しかける。

「なあおっちゃん! きつきはごめん!」

「し、しつれないなお、おにぎりくん。も、もう怒ってないんだな。でも、き、君たちが失礼だったことはわ、わかってるんだな。」

「そんな! お握りまでご馳走したのに!」

「お、お握りをつ、作ってくれたのはお姉さんで、き、君たちはなにもしてないんだな。」

「ひどーい! なんてそんなこと言うの?!」

「ち、ちゃんと謝ってくれたのはあいちゃんだけなんだな。君たちは

謝ってないの、ぼ、ぼくにはわかるんです。」

きよしはまだ根に持っているようで子供達冷たく対応する。

それを見て苦笑いをしている梓と冷静にきよしを見ているコナン。灰原は一人カフェオレを飲みながら子供達の様子に呆れているようだ。

「なあ、灰原。あの人もしかして…」

「ちよつと江戸川くん？失礼なことを言うつもりじゃないでしょうね！？」

「いや、そんなつもりはねえけどよ…あの人がアスペルガー症候群か？」

コナンがそう言うのと灰原の機嫌が急降下した。

「江戸川くん…障害がある人を騒ぎ立てるなんて…最低よ？」

底冷えするような低い声でコナンをたしなめる灰原

それに気づかないコナンは話続ける。

「何でだ？あの人が変な行動を取るのには障害のせいなんだからしょうがねえだろ？」

などと話しているときよしと話していた三人もコナンの話が聞こえ大声で話し始める

元太「おーいコナン！なんだそのアスベストって？食えるのか!？」

光彦「違いますよ元太くん！アスペルガー症候群。別名発達障害ってやつですね。他にも色々言い方はありますが…たしか大人になるまでに知能が上手く育てられない病気…でしたっけ？」

歩美「え？おじさん勉強できないの？」

コナン「ちげーよ。大体光彦の言うとおりなんだけど、そもそも文字が理解できなかったり、勉強が出来る出来ないじゃない。障害なんだよ。ほら、他の学校とかだと特別学級がある話とか聞くだろ？それは清さんみたいに障害を持った人かわいそうな人でも学校に来れるよう学校が配慮してるからなんだ。」

と自身の知識を出し、障害について話すコナンとそれに感心する三人。



コナンの後ろで灰原は凍りつく視線を放ちコナンを責める。

「貴方ねえ…まるで障害がある人がかわいそうな人みたいな説明はやめなさい！子供たちに貴方の偏見をそのまま植え込むことになるのよ！清さんは話をしてもまともな人よ？ましてや食するときだつてマナーをしつかり守るような教育を受けた人だわ！」

余りにも偏見を含むコナンの説明に憤る灰原。

ヤベツと焦るコナンは

「いや、きよしさんがまともなことは分かったけどよ？世の中じゃそういう人もいるからオメーらも気を付けろよ？と…」

と、さらに偏見を晒すコナン。

それにまた怒鳴る灰原。

それを聞きながら子供たちは清と話をしていた。

元太「おっさん。オメーかわいそうなんだな…」

光彦「僕、初めてこういう方に会いました…」

歩美「おじさん、かわいそう…」

コナンの話を聞き、きよしを哀れむ三人。

きよしは慣れっこだ。

変な子と言われたりいじめだつて受けてきた。

嫌なやつからは面白がられ、いいやつにみえるやつでも哀れむだけで

変な目で見てくるのだ。危機

そんななかでも優しい人はいることを知っているきよしは、

この場に優しい人がいなかったと割りきっているだけだ。

勿論、お握りをくれた梓や関係ないのに謝ってくれた灰原はいい人だと思っているが、少なくとも他の子供はろくな奴じゃないと判断し、途中から反応もしないようにしていた。

灰原の怒りが怒られていたコナンからきよしにしつこく憐れんでいた三人にも飛び火し一通り怒られ店内が暗いムードに包まれていたとき、また入り口のチャイムが鳴った。

「ただいまです梓さん。言われたもの全て買えましたよ…」

ああ探偵団の皆いらつしやい。それと…お客様かな？」

色黒の金髪の店員が帰って来た。

事情を知らない安室にきよしを連れてきた経緯を話し、喫茶店内の流れも話すと聞いていた安室は苦笑いをし子供達を嗜めた。

「あのね皆、きよしさんはなにもルールを破っていないかったんだろ？ それをとやかく責めてたのはコナンくんが悪い。勿論原因の君たちもね？」

そして彼の病気についても憶測だし、それでかわいそうだって言うのはきよしさんに失礼だよ？」

なにも言い返せない子供達はまたきよしに謝るのだった。

安室も子供達の失礼に謝罪をし、きよしは安室にも少し喋るようになったのだった。

子供達は相手にされないながらも話しかけ、また返答がなく落ち込むというループに嵌まっている。見かねた灰原がきよしと子供達に入り、質問に答えさせることに成功したのだった。

そして安室と話すコナンはきよしの動向を怪しんでいた。

「ねえ安室さん。あんなこと言ってたけど多分きよしさんは……」

「そうだね。自閉症かアスペルガー症候群だね。」

「なんだい？彼が危ない人だって君は怪しんでいるのかい？」

「ここそと話しかけるコナンに灰原に怒られたことを知り少しからかうように対応する。」

そうするとまた灰原に怒られてはたまらないと慌てたコナンが聞くのだった。

「ち、違うよ！でも知的障がい者が問題を起こすことだってあるよね？」

と場を取り繕おうとするが、安室は呆れる。

「あのねコナンくん？確かにそういう事件もあるけど、少なくともきよしさんはそんな人じゃないよ。僕も少ししか話しはしていないが、ルールは守ろうとするし僕がお店に入ったとき、きよしさんは離れた場所にいた君以外を前に出て庇おうとしていたよ。」

咄嗟にそんなことが出来る人が犯罪を犯すなんて僕は思えないなあ」

と、お店の外からガラス越しにきよしと子供達が見えた安室はきよしの行動を注意していたのだ。

そして咄嗟に子供達を庇おうとした行動を見て好意を持ったのだ。黙り混むしかなかったコナン。

「ええー！きよしさん日本中を旅してるのー?!」

歩美の大声でまたきよしに視線が集まる。

どうやら子供達…もとい、灰原が聞いた話によると

きよしは日本中をあちこちお握りをもらいながら旅をしているらしい。

家はあるが旅が好きなので帰っていないらしいのだ。

いい歳をした障がい者などが旅なんか…などと考えるコナンであったが、警察に搜索願など出ていないか確認するかと話している

と、きよしは警察には浮浪者だと苛められているのでお世話になりたくない泣いて頼むのだった。

更に話を聞くと今日からしばらくこの辺りをふらふらしようとしているがお金もあまり持っておらず、河川敷で寝ようと思っていると嬉しそうに話すきよしに皆が心苦しくなった。

光彦「僕の家には誘おうにもお父さん達が何て言うか…」

歩美「私のママも…」

元太「うちは今日父ちゃんが酒飲んで来るから知らないおっさんがいるとどういう目にあうかわかんねえし…」

灰原「博士の家は大丈夫だろうけど…確認するわね」

コナン「小五郎のおっちゃんの事務所はなあ…お客さんが来るから、きよしさんがいるとどういう目で見られるか…」

梓「私は一人暮らしだから…きよしさんが悪い人じゃないのはわか

るけど…」

安室「僕の家はここから遠いですし…もし行方が分からなくなっても探偵の仕事をしていたら探しに行けませんし…」

あまりいい雰囲気ではなかったが、博士に確認を取っていた灰原が許可を得たことで住居に関してはクリアしたのだ。

そしてこの街に在る間はポアロで働いて次の旅のためのお金を稼ぐこととなった。

ポアロは梓と安室が気に入ったこともあり、すぐに店長が呼ばれ最初は障がい者だと言うことで少し嫌悪していたが、挙動は怪しいが根がまっすぐなきよしはすぐに気に入られた。

一人旅をしているというのも男として感じるところがあつたようだ。

少し仕事のテストを試してみたところ手が震えたりしているが、水が溢れるようなこともなく、注文はいつも客がカウンターに聞こえるようにしていた為問題もなく、配膳と清掃をすることとなった。

きよしの今後の話も決まったところで子供達は解散した。

灰原はきよしを連れ立って博士の家に向かう。

きよしは嬉しそうに灰原に付いていく。

灰原はふと、きよしのスケッチブックが気になった。

喫茶店で誰が見ようとしても取られまいと抱え込み、誰にも見せなかったのだ。

「ねえきよしさん？」

「な、なにかなあいちゃん？」

話しかけられたことに少し驚いた様子だったがすぐにこりと笑顔を向けるきよし

「その、大切なものだったらご免なさい。そのスケッチブック…どんなものを書いていいのかしら？」

興味がち勝ってしまった質問してしまった灰原は、コナンを笑えないと少し自虐めいた気持ちになっていた。

障がい者であればメモ帳だったり、日記だったりプライベートな

ことを書いているのかもしれないのに…

少し考えたきよしはスケッチブックをパラパラとめくると、嬉しそうにそれを灰原に見せる。

灰原は息を飲む…

黒い背景にちぎり絵で表現されたその花火は、まさに目の前で広がり音まで聞こえてきそうであった。

それはきよしが旅先でお世話になった方たちに置いていく作品とは違い、一人で見た花火を描いた作品であった。

そして思い出す。とあるちぎり絵の得意とする芸術家が花火を好んで描くことを…

黒の組織に所属しているとき、RUMが大枚をはたいてその芸術家の作品を大量に競り落としており、志保のいた研究所にも飾られていたのを…

その芸術家が目の前にいる。

博士の家に連れていこうとしている

山下 清

ついて歩く清を見て頭のなかに

裸の大将

という単語が出てきたが、それはまた別の話…